

# 文芸研ニュース

2019年12月26日

—NO. 152—

発行 文芸教育研究協議会

編集 文芸研事務局

## 目次

巻頭 上西委員長より・・・・・・・・・・・・・・・・	1
かごしま大会総括(佐多先生)・・・・・・・・・・	6
初レポートを終えて(枚方サークル・浅海先生)・	7
実践報告を通して(秋山先生)・・・・・・・・・・	8
祖母が記した出産簿を読む(津軽・睦子先生)・	9
青年学校便り(唐津サークル・川口先生)・・・・	10
事務局通信・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	12



次は山口を熱く！

Society5.0 \* 1

## 先生も教室もいらない時代が来る

―公教育解体の危機、教育・ICT産業が

学校教育を乗っ取る―

上西信夫（文芸教育研究協議会委員長）

▼高校生の反対行動や荻生田文科相の「身の丈」発言で英語の民間試験の活用延期が決まったが、二〇年度から導入される大学入試共通テストの国語と数学の記述式問題にも引き続き厳しい批判が必要である。文科相の「身の丈」発言は失言ではなく、現政権・産業界の本音である。これらの問題の本質は、公教育を教育市場として民間事業者に大胆に解放していくこと――民間活力を最大限活用し公教育と民間教育の垣根をなくし、公教育を希釈化する新自由主義的な「教育改革」・学校の民営化の一形態と考えると氷解する。高校生たちや教育関係者の反対は、学校の市場化・民営化によって学習権保障や教育の機会均等、無償化の原則、教育の中立性などの戦後民主主義教育の理念がなほ崩的に溶解することへのまっとうな異議申し立てである。

▼新しい高校学習指導要領の告示（二〇一八年三月）からわずか三カ月後の六月、文科省は「Society5.0にむけた人材

育成——社会が変わる学びが変わる」を発表した。そこでは **ICTを活用した「公正に個別最適化された学び」** が強く打ち出された。ICT教育の推進・高校の普通科の類型化（細分化）・文理横断の教育の推進が提言された。学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」などどこかへ吹っ飛んでしまった様相である。児美川は\*2、近年の教育政策（と見えるもの）は、その実は経済産業省が主導する国家戦略や産業政策に組み込まれ、そこで求められる人づくり政策を、せめてもの繕いで「社会に開かれた教育課程」など「教育的」に表現したものでしかない。今日の文科省は、もはや教育政策の策定主体の座から引きずり降ろされていると言う。（元事務次官・前川喜平の乱はその象徴的な事件）この間の文科省の迷走の背景は経産省の産業政策に追隨した結果のものだ。グローバル経済競争のもとで喘ぐ産業界の要請\*3に応えたエリート層に対して手厚く、彼らの「主体性」や「創造性」を伸長させることができるよう高校教育を徹底的に改善することをねらっている。高大接続改革・学習指導要領の「資質・能力」・英語4技能・理数科の設置・国語科の情報処理能力と論理的思考の重視など同じ文脈で読み解くことができる。

高大接続改革は、「大学入試共通テスト」における記述式問題の採点、英語4技能の検定、「高校生のための学びの基礎診断」の実施運営そのものを民間事業者に丸投げすること、この方向に公的なお墨付きを与えた。今後は、Society5.0

を見据えながら、ICTを活用した個別学習、情報教育、文理横断のSTEAM教育など民間事業者による公教育への参入が飛躍的に進展していくことが危惧される。学校教育という枠組みが希釈化され、民間事業者による教育と公教育の垣根がなくなるという未来が、そこまでやってきている。

▼公教育の市場化（民営化）は、高校教育だけの問題ではない。小中学校でもドリルなど毎日の学習記録（スタディログ）がタブレット端末などからデータ化され、日本全国の子どもの情報がビッグデータに集積されていく。それをAI（人工知能）が解析して一人ひとりの学習状況に照らして「公正に個別最適化された」学習計画や学習内容を提供するという。パソコンやタブレットを使って一人ひとりに最適化された学習がこれからのスタイルになり、一斉授業ではなく、異年齢でもいい、教室でなくても家でも塾でも学習の場となる。先生もネット上の「先生」でもいい。先生も教室もいらない時代がくるというのは、遠い未来の話ではなく、国家プロジェクトとして周到に進行しているのだ。さらに学校法人の許可基準を緩和し、株式会社立学校（すでに教育特区として認められている）やインターネット授業だけで高卒資格がとれる広域通信制高校などの弾力化がさらに広がっていくだろう。「宿題なし」「クラス担任制の廃止」「中間・期末テストの廃止」など東京都千代田区麹町中学校の「学校改革」が話題になっているが、「個別最適化学習」された学習であればそれらは必要ない。この学校は「**個別最適化学習**」を企業

とともに**実証研究**している**経産省の研究校**であり、校長は政府の教育再生実行会議の委員でもある。

▼教育内容の市場化・民営化も要注意だ。学校のシステムやカリキュラム、個別授業の内容や方法、教える先生のプログラムなど、学校教育の内容にかかわるすべてが、企業の商品として開発提示され、組み込まれていくことに対する危惧だ。私立高校でのコンサルティング業者の導入、公立高校も含めた授業面での塾・予備校との連携、学習診断テストや教材・進路情報の提供、eポートフォリオを含む学習環境プラットフォーム、校内個別学習塾の設置などの動きが加速・拡張されることが予測される。

▼ICTを活用した「公正に個別最適化された学び」の何が問題なのか。\*4端的言えば企業社会が期待する人材育成に、一人ひとりが「最適化」されていくことになりかねないということだ。憲法に基づく学校教育では一人ひとりの人格の完成が最大のテーマであり、社会の担い手となる主権者の育成という公教育の大事な役割が消滅していくことと、多様な子どもたちが共に学ぶことで、新しい価値を創造していく学級・学校から協同の学びがなくなる危険性がある。さらに市場化が進み、公教育が後退すれば、教育は私費で（身の丈に応じて）ということになり、国民の教育を受ける権利、教育権が消滅してしまうことになりかねない。

## 小さな学校の確かな歩み

### ―協同の学習をこそ

▼十一月二十七日で青梅市立第七小学校の今年最後の校内授業研究会が終わった。第七小学校は全学年単学級・児童数八〇名ほどの小さな学校である。校内研講師の声を掛けていただいてから三年が経つ。七小の先生方は八王子の学習会や昨年の横浜、今年の鹿児島大会にも参加してくれた。研究主題は「自ら考え、みんなで学ぶ子どもの育成——つけた力をもとに、分かる・できる・楽しいを実感し、共に学び高め合う国語・算数の授業づくり」。

一年から六年まで今年扱った教材は、「おおきなかぶ」「スイミー」「ありの行列」「一つの花」「わらぐつの中の神様」「海の命」。三年間で光村の主な定番教材は取り上げたことになる。単学級小規模校ゆえ、事前の教材研究・授業準備は全教職員で取り組む。学担はもちろん、算数少人数担当、音楽・図工専科、養護、校長・副校長、学校相談員こぞって事前に模擬授業をやって研究授業に臨む。該当の授業者には事前に私がマンツーマンで対応する。研究授業では忌憚のない相互批判があり、学び合う教職員集団である。研究協議では子どもが固有名詞で語られる。全教職員が子どもの名前はもちろん、子どもの生活を含め丸ごと知っているのだ。

▼教育という営みを成立させる前提は、個別具体的存在とし

ての子どもと教師の承認である。だれとも交換不能である子どもと教師が、日々の対話と応答をとおして紡ぎだしていくのが教育である。教師の一番中心的な仕事——授業づくりと子ども理解に全精力をかけている。個々の子どもたちの人間的発達を見据え、教材の特質をふまえた、想像力と認識力・表現力を育てる国語の授業づくり、子どもも教師も真に「主体的・対話的で深い学び」を追求している。

▼「海の命」（立松和平）を読み合った六年の子どもたちは（おわりの感想）で次のように綴ったと担任のK先生は八王子の学習会で報告してくれた。

——自分の家族が昔からつながっているのは、先祖が命を受けついでいってくれているからだと思う。学校での行事も、受けつがれていることにあらためてすごいと思った。（K）

——海、陸、地球全体で生きている命は、一つの命に。一つ一つから成り立っている、何千人もの命を背負って生きているし、この先は、自分たちがこの何千人もの一人に入って、次の命へとつないでいくことなのかなと思った。（H）

——…この「海の命」を読んで、みんながここにいます「すごさ」「奇跡」がわかった。学芸会で命に関わるお話をやるから、全力で演じて、他の人にも命の大切さをわかってほしい。

（A）

——最初は、自分で気づけないことばかりだけど、みんなでおしゃべりするうちに気づいたり、「へえー」と思ったり、みんなで考えてよかったと思った。立松和平さんの作品は、

命について考えている作品が多く、自分たちで命について考えることができてよかった。（Y）

——あらためて命の大切さを知ることができた。そして、つながれてきた命がここで終わらないように、自分も命をつないでいきたい。今までの授業では分からなかったことを、みんなで考え、確かめながら授業ができてよかった。（M）

——「海の命」全体を読んで、自分の命もみんなと関わり、受けつがれていくことがわかったから、自分の命を大事にしたい。一人ではじめ読んでわからなかったことが、二十二人で解決できた。自分一人の命では生きていけない。（A）

▼子どもたちが個々別々にパソコンの端末と向き合えば「主体的」な姿勢と言えるのか。AIが投げかける問いや問題に「対話的」に応答すれば、「深い学び」が実現するとも言えるのだろうか。<sup>\*5</sup> 七小の「海の命」の授業の事実、ICTを活用した「公正に個別最適化された学び」とは対極の協同の学びがある。みんなで学習することが楽しく心地よい、一人ではできないことができるようになるという学習体験が、将来様々な困難や課題を協同の力で解決していく民主主義社会の主権者を育てることになるのだ。

▼子どもの一人ひとりの人間的な発達を願い、ことばの獲得——想像力と認識力——が人格形成にとって決定的である、そのことへの確信と教授目標の明確化で子どもの変容をもたらすことへの納得が、七小の教師集団を授業づくりへと駆り立てるのだろうか。

算数講師は明星学園・数教協のF先生。私も含め民間教育研究団体の講師を招聘し、校内研を展開できる稀な学校である。その七小の研究を牽引するのは、自らも体育同志会や数教協で学んできた研究主任のT先生だ。「校内研が楽しくて仕方がない」「確かな手応えを感じる」という先生方の声があるという。子どもの変容と教師の授業に打ち込む姿は管理職の共感も得ることになる。文科省・教委の施策をただ垂れ流し、こなす研究ではなく、目の前の子どもに現実の切り込み、子どもの人間的な発達をめざす仕事こそ教師の矜持だ。毎回授業記録を起こしてくれる図工専科のK先生は、「毎回の校内研は教師としての誇りを感じさせてくれる時間です」とまで言ってくれた。

子どもと教師が教育実践の主体として出会い、日々の対話や応答をとおして共に成長していく場へと、学校を甦みがえらす道筋がここにある。

#### 【註】

\* 1 Society5.0—これまでの社会は狩猟社会 (Society1.0) から農耕社会 (同2.0)、工業社会 (同3.0) を経て現在は情報社会 (同4.0)。これからは、さらに発展した新たな情報社会 (同5.0)、世界に先駆けた「超スマート社会」の実現 (Society5.0) と明記され、安倍政権が掲げる成長戦略でも日本社会の抱える課題を解決する重要なキーワードになっている。サイバー空間 (仮想空間) とフィジカル空間 (現実空間) を高度に融合させたシステムにより、経済発

展と社会的課題の解決を両立する人間中心の社会。AIやLOTの導入で、ドローン・自動車走行・遠隔医療・無人店舗・スマート農業などの例がよく知られている。少子高齢化・地域格差・貧富の差の課題を解決し、一人一人が快適に暮らせる社会の実現が目的。(内閣府)

\* 2 児美川孝一郎—こみかわこういちろう 1963年生まれ 法政大学教授 専門は青年期教育・キャリア教育 日本教育学会理事 「キャリア教育のウソ」「高校教育の新しいかたち」「夢がある社会に希望はあるか」など著書多数／「クレスコ」大月書店 2019年7月・220号論考「高校教育はどこへ向かうのか?—改革」の危険なねらいを乗り越えて、本来求められる役割へ」参照

\* 3 IMD「国際競争力年鑑」によると、日本の国際競争力は1989年の1位から今年は30位まで落ちた。(バブル失調後の「失われた30年」) 大企業の内部留保を増やし、個人の所得を減らし、社会保障の負担増などアベノミクスの失敗。格差拡大の矛盾や社会不安の増大。せめて教育を大企業とそれを支援する国づくりに貢献できる「人材」の育成の場にしたという「愚策」(「教育のつどい2019」(滋賀教研)教育フォーラム③での児美川発言主旨)

\* 4 「東京民報」2109号 児玉洋介(教育研究家・元都教組委員長)インタビュー記事

\* 5 前出・児美川論文

# 文芸教育研究協議会全国大会

## かごしま県大会を開催して

かごしま文芸研事務局長 佐多 巖

まず充実した2日間でした。かごしま文芸研の先輩方が中心になり、後輩の私たちやしばらく遠ざかっていた元会員たち、次世代を受け継いでほしい新しい協力者の皆さんに、歴史をつなぎ広げていく姿に元気をもらいました。

もちろん全国の会員の皆さんの支えはともありませんが、感謝しております。

上西先生からの提起では、ますます大変になっている現場でどのように文芸研の理論と実践を生かしていくか、これまでの文芸研としての向き合い方から話していただき、これまでの実践のすごさを感じることが出来ました。文芸研の会員として現場ですべきことが沢山あることに気づかされました。

講演会には木村草太さん、内田麟太郎さんというビッグネームを二人もお招きいただき、文芸研のこれまで築き上げてきた信頼と実績の確かさに驚きました。木村草太さんには「子どもの人権と憲法について」内田麟太郎さんには「童話作家として」語っていただき、参加者の方々からも喜びの声を沢山頂きました。

交流会には、かごしま文芸研の誇る先輩ミュージシャンの登場を盛り上げていただきました。かごしまと言えば交流会と言っていたいただき、おもてなしさせていただいた私たちの方が楽しんだのではないのでしょうか。

分科会には全国から集まったレポーターの方々の深い分析と実践が報告されていました。参加者の皆さんはこの分科会でも、その実践に感動し改めてこの鹿児島に文芸研の実践が広がっていくのを感じました。この情熱を絶やすことなく、かごしま文芸研がもたらした元気をこの鹿児島から発信していくことをお約束してお礼に代えさせて頂きたいと思っています。

終わりに、一年前から組織作り、会場探しから準備に取りかかり計画を進めてまいりましたが、不手際も多く、特に全国の参加者の皆さんにはご迷惑をおかけしたと思っております。それでも、笑顔で「楽しかった」と言っていた「また会いましょう」とお別れさせていただいたことに感謝しております。本当にあります。本当にありがとうございました。

かごしま文芸研を代表してお礼を申し上げます。







## レポート発表を終えて

大阪文芸研枚方サークル 浅海 勲

日々の国語の授業に悩み、初めて枚方サークルの「国語の教室」で学んだときの衝撃を今でも覚えています。発問の仕方や板書の仕方などを教えていただき、目から鱗でした。日々の生活が忙しい中で少しでも勉強できればと、サークルで学ばせていただくことになりました。

それから3年が経ちました。初めて「わらぐつの中の神様」のレポートをまとめさせてもらうことになって、教えてもらうことだけでは学べない、自分の言葉でまとめることによつてしか得られないことがたくさんあることに気がつきました。授業をテークレコーダーやビデオで撮って見返すと、自分の発問の癖や、子どもの貴重な発言をいかに今まで流してきたのか、など授業を振り返ることがなかった自分にとつてすごく勉強になることばかりでした。また、自分なりに考えた教材分析を他の先輩先生方に見ていただくと、違った見方でアドバイスをいただきました。一人でまとめると気がつかないようなことをたくさんの方に教えていただいたことで、レポートが深まったように思います。

そのレポートを全国の先生方に見ていただき、一緒に考える中でさらになるほど！と思えるような見方を教えていただきました。おみつさんの人物像についてです。私のレポ―

## 実践報告を通して

千葉松戸サークル 秋山 亮介

トでは、しつかりとした考えを持ってわらぐつを作るおみつさん。しかし、決してそうではなく、自分の作るわらぐつに絶対の自信を持てず、外見が悪くても中身がよかつたらいというそんな考えも、心の中で、本当にそれでいいのかと揺れ動くおみつさんではないのか。そんな見方をする先生と出会い、衝撃でした。全く頭になかった見方でした。レポートは、発表し色々な先生方に見ていただいて、意見をいただき、先生方と議論することで初めて完成するのだなと感じました。

この教材を通して子どもにどんなことを伝えることができたのか分かりませんが、授業をする度に子どもの書く感想が深い内容になっていくのが分かりました。また、最後の感想に、ある子どもが「やつぱり、文章はすごいなあと思いました。文はより深く考えるところなことが見つかるんだなと思いました。」と書いてありました。文章の裏側にある深い意味について考えてほしいと思っていた自分にとって、素直にうれしい感想でした。子どもたちが、主体的に深く考えるきっかけになる授業になったらいなと思っています。

最後に、レポートを作成するにあたって、枚方サークルの先生方をはじめ多くの先生方に協力していただきました。本当にありがとうございました。

私は、この夏の鹿児島大会から、「組合の全国教育研究集会」、千葉県の「民間教育サークル交流集会」に参加してきました。秋には、「組合の県教育研究集会」、「民教連全国交流集会」など、様々な場で、国語の授業実践報告をする機会をいただきました。

実践報告をしていると、他の参加者から「文芸研の教材分析は『難しい』。子どもには分からないのではないか。」という意見が出るときもあります。確かに、複雑なところがありますし、私自身もその「難しさ」に四苦八苦していることもあります。ですので、実践報告では与えられた時間が短くても、全国大会の分科会で行なっているように、子どもたちの生の声や反応を書き起こした授業記録をなるべく丁寧に報告するようにしています。そうすると、参加者も肯定的にとらえてくれることが多いです。自分の力量不足でうまく行かなかった部分も含めて、子どもたちのリアルな声や感想は、授業の様子を想像させ、子どもたちの生き生きとした姿に「子どもたちには難しい。」という思いもなくなっていくのではないか、と思っています。

教師のより深い教材分析があるからこそ、子どもたちの意見にも寄り添うことができ、子どもたちが生き生きとし



た授業を作ることができる、ということは、私が文芸研で学んだことです。

松戸サークルは、今年、新たな仲間を迎えることができ、さつそく来年度のレポート提案を引き受けてくれました。例会で教材の分析に取り組んでいく中で、改めて発見すること多いです。

## 祖母が記した出産簿を読む

津軽サークル 高橋睦子

「年に一回ずつ、全員がなにがしかの提案をしよう」というのが、今の津軽サークルの約束事です。

私は今年、産婆（助産師）をしていた祖母が残した出産記録を読み解いてみました。その出産簿は、

昭和二年（三年） 出産簿 奥田ちゆ

と書かれた表紙のついた、ごく薄い綴り一冊なのですが

『男女別』『生死ノ別』『分娩年月日時』

『分娩場所』『母の住所族籍職業氏名』

という欄には、二年間に祖母がとりあげた新生児二九八人分の記録が残されているのです。圧倒されるものがありました。まだ名前は書かれていないけれども、小さな命がこの世に誕生した証がここにありました。

西郷先生の著作集の4集に、「あゝ野麦峠」の「記録性」

について次のような叙述があります。

（人名・地名のもつ重み・・・それは、ある時、ある所、ある人についての事実の記録である。しかしながら同時に文芸であるということは、それが、特殊な一回きりの事件が語られているということだけでなく、そこには人間の普遍的な真実が語られている）

私はこの文章を読んだとき、祖母の記した出産簿をも、このように読みたいと思いました。もちろん祖母が書き記したものは文芸ではなく「記録」です。五つの項目に沿って事実を書き残したに過ぎません。しかし「北津軽郡松嶋村大字一ノ坪小野そだ 二十四才」とあるその上にある「生」の字を読むと、赤子を胸に抱いてほっとした表情の女性が浮かんできます。どの欄にも、文字の裏に母と赤子の顔がみえるのです。どの時代にあつても変わらぬ喜びの姿です。祖母も嬉しかったことでしょう。

もう一方で、記された日付や時刻に目をやって読んでいくうち、祖母の仕事は『激務』といつていいのではと思えてきました。

自動車もない時代に、産婦さんのいる自宅までどのようにして駆けつけたのか、分娩にどのくらいの時間がかかったものなのか・・・今の時代からは想像もつかない難産もあつたことでしょう。疲れもとれないままに、次の産婦さんのところにかけてつけることもあつたに違いありません。大変な仕事だったと思います。

一月二月であれば、息もできないくらいの吹雪の日もあったはず。そのような中、若き日の祖母は、モンペに角巻（かくまき）をはおり、黒い箱型の医療カバンをにぎり、使命感に燃えて駆け回っていたのだと思います。

祖母自身も、子ども（私の母）を育てる一人親家庭であり、一緒に暮らせない時期もあったと聞きました。産婆という仕事で生きることについては、並々ならぬ覚悟があったのだと思います。

文芸研に学んだおかげで、困難がたくさんあった中を強く生きた祖母に会うことができました。

## 実り多き夏の青年学校

唐津サークル 川口 芹奈

8月6日・7日に17期青年学校、第1回目が開催されました。私は、青年学校17期から、初めて参加しました。青年学校では、全国の仲間と和気あいあいと自分の考えを語り合い、学習を深めていくことで、学びの楽しさを味わうことができました。全国大会の後だったため先生方に刺激を受け、学びたいという気持ちも膨らみ、意欲的に学ぶことができました。1日目は文芸研委員長の上西先生に、

2日目は現地実行委員長の林先生にご講義いただきました。

1日目は、上西先生より「子どもたちに詩をいっぱい」をテーマに、詩を選んでいただき、その詩について考えながら、理解を深めることができました。初めは、「あいいうえお」（あらいたけこ）の詩で、母語としての言語の豊かな教育ということで、詩を声に出して耳で聴く体験の重要さや音節が少ない日本語ならではの、異口同音の面白さに気づかせてくださいました。何気なく話している日本語について、理解が深まる感覚がとても新鮮でした。詩を使い言葉に注目することで、自分の音数や音に対して気づくことが増え、学ぶことで変わる感覚を実感することができました。また、「くだもの」（谷川俊太郎）や「音の歳時記」（小泉周二）を使った、擬態語・擬声語の学習では、言葉としての指導の大切さと、声喻から広がる豊かなイメージの面白さを感じました。さらに、詩~~唐~~絵画性ということが私にとってとても衝撃を受けるものでした。「慟哭」（大平数子）の詩では、連や一文字の違いで悲しみや緊迫感が使わつてきて、一文字の重さや詩に込められている思いが、学習をすることで重みを増しました。他にも「戦争」（内田麟太郎）の詩では、「十」のみで書かれた詩を、題名の戦争という観点が加わることで、兵隊や墓などさまざまなものに見え方が変わり、詩から読み取る意味にぞっとしました。上西先生が出していた詩は、知らないものが多くあり、自分の授業の幅も教養も広げることにもつながると感じまし

た。「ゆうひのてがみ」(野呂昶)では、「ゆうひのてがみ」の持つ、現実とも非現実的とも読むことができる書き方か、言葉のイメージの広がりや味わい深さを感じることができました。ご講義の中で上西先生の「子たちの反応は、私たちの投げる石(発問の質や大きさ)で変わり、授業は子どもと教師で互いに深め合っていくもの」という言葉が、心に残っています。青年学校では、少人数で、1日を使って、講師の先生にご講義していただくため、上西先生が教師として大切にしてあることや子どもたちに向かう姿勢など、内容だけでなく、先輩の先生から生き方も学ぶことができたことに、この青年学校ならではの良さを感じました。

2日目は、現地実行委員長の林先生にご講義をしていただきました。林先生は、詩を使い、実際に授業を組み立てる実践の形で講義をしていただきました。子どもたちに学ばせるなら、何を学ばせるかどんな認識が深められるかについて考えました。詩を読み、互いに考えた授業を出し合い、交流をしました。自分の考えを出し、人の考えを聞くことで、正解のない問いの学びが深まっていく充実感を味わうことができました。子どもたちにも、充実感や達成感を味わうことのできる授業をしたいと思いました。「いちねんせいのおた」(なかがりえこ)では、初めの連のとらえ方が違うことが交流することで初めてわかりました。「おおくくなあれ」(さかたひろお)では、設定された話者を考えることによる詩の広がり、同じ声喩でも、ブドウとリンゴ

では、広がるイメージが変わること、そして果物の持つ「価値」について考えました。そして、それぞれの典型化が違い、読む人の条件によって感じるものが違い、その違いの豊かさについて感じることができました。「雑草」(北川冬彦)では、題名の雑草から連想するあまり良く思われぬイメージが、類比になっていく連の一文だけが違うことで、生き生きとした力強いイメージが変わっていく面白さを知ることができました。「六月のおた」(片岡文雄)では、土佐の方言が使われていて、作者の設定する二人の話者を考えていくことで、二人の関係性が見えてきたり、方言の温かみを感じたりすることができました。林先生は、方言の良さや言葉の違いについても話して下さいました。鹿児島全国大会の開会宣言を鹿児島島の方言でされた思いも話してくださいました。方言は、その土地で培われた大切な文化の一つで、意識して考えることで、改めて人々が作ってきた歴史や文化の温かさを感じることができたと思います。また、鹿児島島の良さや歴史、鹿児島文芸研で作ったかるたなど、現地だからこそ、聞ける話を聞かせていただき、青年学校の地方開催の魅力を感じました。

第一回青年学校に参加させていただいて、知識がなくても、丁寧に実感を伴った学びをさせていただくことで、教師の私自身が、「学び」の面白さを感じることができました。文芸研の認識の方法を学ぶことで、より豊かな授業を考えていくための方法が少しずつ分かってきました。また、少

人数でのアットホームな学習ができるため講師の先生のお人柄に触れることができ、体験されてきたことなどお話を聞くことができたことが貴重な体験となりました。そして、全国で頑張っている仲間に出会い知り合いになることができたことも大きな宝だと感じています。夜の交流会もとても楽しく、語ることでできる仲間に出会い、学びの充実感が感じることのできる次の青年学校が楽しみです。

## 事務局通信

★第五十四回文芸研 かごしま大会も300名を越える参加者にお越しいただき、無事に終わりました。一

年に及ぶ皆様のご協力のおかげで、素晴らしい大会になったと思います。かごしま文芸研の林さんを始め、佐多さん、北山さんが中心になり、運営をしていただきました。ありがとうございました。九州ブロックの皆様の団結力もすてきでした。また、交流会の歌って踊ってのエネルギーが印象的でした。

次は、五十五回大会を山口で行います。清田さんを中心に中国ブロックの皆様の力で、また暑い夏にしていきたいと思えます。全国の皆様また来年に向けてよろしく願います。

★新読者社より、「わらぐつの中の神様（文芸研の授業シリーズ4）」が出ています。ぜひ、周りの先生にお勧めするとともに、学習会でも周知お願いします。光村図書から今年度をもつて「わらぐつの中の神様」もなくなります。光村図書の教科書を使っている地域の方は学年の方には是非おすすめください。一人一人の行動が文芸研の運動につながっていきます。授業に困っている先生はたくさんいます。板書に発問、また子どもの様子もわかりやすくまとめっており、お勧めできる授業シリーズです。サークルでも学習に使っていただき、サークル員全員で運動を盛り上げていきましょう。

また、文芸教育誌も全国のサークルのお力で編集しています。ぜひ、まずは皆さんに手に取ってみてもらい、知ってもらうことから始めていきましょう。

### ☆今後の予定☆

冬の実践研（神戸）	2019年12月26日（木）	・27日（金）
春の実践研（神戸）	2020年5月9日（土）	・10日（日）
全国大会（山口）	2020年8月1日（土）	・2日（日）